

大人になることの意味

まだ幼稚園にも入っていないころ、迷子になったことがある。それは搜索願が出されるほど、用水路のなかまで搜索がおよぶほど、本格的な迷子だった。きっかけは、こうだ。従兄弟のお兄ちゃんたちと遊んでいるとき、よちよち歩きの僕がじゃまになったのだろう、お兄ちゃんたちは僕を置いて小学校に遊びに行った。それを追いかけるためサングダル履きのまま家を出た僕は、曲がり角でお兄ちゃんたちを見失い、迷子になった。結局、交番に保護されて事なきを得たのだけど、どんな道をどれくらい歩いたのか、なにも覚えていない。誰にどう保護されたのか、ひとつも憶えていない。ただ憶えているのは、遠く離れて小さくなっていくお兄ちゃんたちの背中だけだった。

『ホイッパーウイル川の伝説』のはじまりを読みながら、久しぶりに迷子になったあの

日の記憶がよみがえった。ある冬の日、小学  
生の女の子ジュールズ・シャーマンは、姉の  
シルヴィに置いて行かれる。学校一の俊足で  
あるシルヴィに追いつけるはずもなく、追い  
かける勇氣もない。なんといってもシルヴィ  
は、パパから「絶対に近づいてはいけない」  
と言われていたホイツパーウィル川の通称「  
奈落の淵」へと駆け出したのだ。

置き去りにされた妹ジュールズの不安や苛  
立ちは、僕にもよくわかる。置いて行かれた

ことがくやしいのではない。ただ「どうしよ  
うもないほど子どもである自分」が、つらく  
、もどかしく、情けないのだ。誰からも一人  
前と認められず、自分でも一人前と思えない  
ことが、たまらなく悲しいのだ。

姉のシルヴィが「奈落の淵」へと走ったの  
は、そこに「願ひ石」を投げ込むためだった  
。「燃えるように熱い、切なる願ひ」を持つ  
た者が投げ込んだ願ひ石は、川底で光を放ち  
、やがて水中の星となって願ひごとをかなえ

てくれる。ふたりが住む地域には、そんな言い伝えが残されている。そしてシルヴィはいつも「もっと速く走れますように」という切なる願いを込めて、願い石を投げていた。どうしてそんなに速く走りたいのか、シルヴィは教えてくれない。ジュールズにはわからない。それもまた、もどかしい。

シルヴィだけではない。一歳年上の幼なじみサムにも、切なる願いがあつた。サムは、戦争でアフガニスタンに行った兄のエルクが

帰ってくることを、ずっと願っていた。そしてたくさんの願い石を投げ続けた結果、ついにエルクは帰ってきた。いま彼は、絶滅の危機が囁かれるピューマが森に戻ってくることを願っている。

ところがジュールズには「燃えるように熱い、切なる願い」がない。まわりから石ガールと呼ばれるほど石が大好きで、たくさんの石を収集しているジュールズなのに、願い石に託すべき「切なる願い」を持っていない。

きっとそれは、ジュールズが子どもだからだ。  
そう、この小説は僕に、「大人になること」の意味を教えてくれたような気がする。

奈落の淵に走っていったシルヴィは、そのまま帰らなかった。木の根っこに足を取られ、ホイッパーウィル川の「奈落の淵」に滑り落ち、飲み込まれてしまった。そして亡くなったシルヴィと入れ替わるように、川を覆う森のどこかに、ちいさな子ギツネが生まれる。  
ギツネの名前はセナ。動物のなかでも特別

な、魂とつながった「ケネン」と呼ばれる役割を持って生まれたギツネだ。

読みながら僕は、悲しみにくれるジュールズに「シルヴィに生き返ってほしい」という願いが芽生えるのだろうと思った。そしてギツネのセナが、シルヴィの生まれ変わりとして現れるのだろうと思った。どんなかたちでもいいから、もう一度大好きなシルヴィに会わせてあげたいと、切なる願いを持った。

ところがジュールズの心に芽生えた「切な

る願い」は、まったく別のものだった。願い  
石を抱えたジュールズは、自分のためではな  
く、戦場で心に傷を負って帰ってきたエルク  
のため、奈落の淵へと駆け出す。そして不思  
議な力を持つキツネのセナと出会い、ピュー  
マと出会い、姉のシルヴィがどうしてあれほ  
ど「もつと速く走ることを願っていたのか  
、その理由を知る。

シルヴィも、幼なじみのサムも、兄のエル  
クも、そしてパパも、みんな「燃えるように  
熱い、切なる願い」を抱えている。それは自  
分の幸せではなく、自分以外の誰かを思う、  
切なる願いだ。ちいさな子どもだったジュー  
ルズにも、ついにその願いが芽生えた。そし  
て、その願いをかなえた。僕は、こうした願  
いのことを「愛」と呼ぶのだと気づく。僕ら  
は愛の意味を知り、心から愛する人を持てた  
とき、ほんとうの大人になるのだ。

僕は大人になれているのだろうか。自分以  
外の誰かを思う「願い石」を持っているだろ

No. ....

No. ....

うか。読み終えたいま、ずっとそのことを考  
えている。